

吉田稔郎：作品 1953 - 1963
 ファーガス・マカフリー東京にて開催

ファーガス・マカフリー東京
 2018年11月3日～12月22日
 オープニング・レセプション：2018年11月3日（午後6-8時）

この度ファーガス・マカフリー東京は、吉田稔郎（1928-1997）の個展を開催いたします。戦後日本美術を代表する前衛グループのひとつ、具体美術協会の初期会員であった吉田ですが、本展覧会では具体美術協会の活動が特に活発だった時期にあたる1953年から1963年の間に制作された作品をご紹介します。ファーガス・マカフリーの東京スペースで吉田稔郎の作品を展示するはじめての機会であり、12月22日までご覧いただけます。

「人の真似をするな。誰もやらないことをやれ」。具体美術協会の創設者である吉原治良の教えに沿い、吉田は1950年代初頭から伝統的な油彩絵画から離れ、全く異なる斬新的な形態や素材を用い実験を重ねるようになります。これらの初期作品は、吉田がいかにか創造性豊かで意欲的な作家であったかを物語っています。

例えば、《無題》（1953年）はパレット・ナイフを使い、板の表面に油彩を薄く伸ばす手法で作られており、画面上には白と黒の扇のようなモチーフが重なり合うように開いています。キュビズム的感性と作家の独特な手法とが融合するこの作品は、ゲルハルト・リヒターのスクレーパー絵画（厚く塗り重ねた絵の具をスクレーパーで擦り落としたカンヴァス絵画）をも予示しています。



展覧会の注目すべき作品のひとつである《無題（54-56）》（1954年）では、鮮やかな赤に覆われた表面の左上部に金属製のフックが様々な角度で留められています。美術と工業製品との境を崩壊させた一例です。

1956年の無題の作品もまた、素材と概念を巡る作家の実験的試みを

示しています。ここではまず、板の表面にコンクリートを厚く塗り、その周りに黒い「縁」を描き、またその周りに厚いコンクリートを縁取るように青の「地」を描いたのです。

これら初期の作品とほぼ同時期の1954年頃から、吉田は〈Burn Paintings〉というシリーズを開始しています。合板に半田ごてまたは熱した木炭を当てることで、表面が繊細な熱傷の跡で覆われます。シリーズから今回展示しております3点は、特に複雑でありながら調和と均整の取れた構図が施されており、水墨画やシュルレアリスムの自動記述（オートマティズム）をも想起させます。吉田が追求した絵画における炎の表現性は、アルベルト・ブーリの

《Combustione（燃焼）》絵画（1955年）やイヴ・クラインの《Fire Painting（火の絵画）》（1957年）の先駆けとも言えます。

吉田が考える「創造的破壊」において、〈Burn Paintings〉は中核となる作品群であるのは間違いなく、他の具体美術協会会員同様、彼は伝統的絵画の手法から遠ざかり、第二次世界大戦後、戦争の惨劇後に得られるようになった様々なかたちの潜在性や可能性に新たな眼で注力するようになりました。

具体美術協会が形成されていくなか、吉田は特にアクション、同時性、そしてパフォーマンスについて深く考察し、演劇により発展したアイデアをのちに絵画制作に応用するようになります。1950年代後半、フランスの評論家であるミシェル・タピエの影響力が大きくなるにつれ、具体美術協会の作家の制作のなかで絵画というメディアがさらに強調されていくのでした。それからの10年間、吉田は自らが考察した



アイデアを具現化することで「絵画」に挑み、形式（フォルム）というものの本質をさらに厳しく問いただしていくようになります。ものの形式を考察するため、吉田は度々舞台上で表現したアイデアに戻ることもありました。例えば、1956年の第二回具体美術展の際、如雨露に入れた墨を10メートル離れたカンヴァスに流し込むという行為により作品を制作し、その数年後、演劇的とも言えるこの手法を再度、パピエ・マシェのゴツゴツとした表面に白い絵の具の飛沫や滴を垂らした《無題》（1963年）で試みたのです。

また、1957年の「舞台を使用する具体美術」展（産経会館、大阪／産経ホール、東京）では、舞台上に物体を配置し電灯で照らし、背後にあるカーテンにシルエットが写る《影》というインスタレーションを発表しました。吉田が、層の重なりやフレーム、枠、縁などのアイデアで実験していたことがわかります。今回展示しております

《無題》（1962年）からみえるとおり、これらのアイデアを吉田はその後10年にわたり模索していくのです。1957年に舞台上で試みた光と影の層やフレーミングの手法

を絵の具に転用し、様々な彩色の層を重ねることで、作品の表面上に光や陰影を作り出すのです。作品上部に配置されているいくつもの四角の「枠」は舞台のステージや絵画のフレームを連想させ、絵画としての表象—何が描かれているのか、何を表象しているのか—について自己言及しているかのようです。白黒の色調が多い1960年代に制作された他の作品に比べて、《無題》（1962年）は、色彩が鮮明にあらわれるという点でひととき我々の目を引きまします。

吉田稔郎

1928年、神戸生まれ。吉田稔郎は、具体美術協会の創設者である吉原治良の父が経営していた油問屋（のちの吉原製油、現在のJオイルミルズ）で秘書兼デザイナーとして勤務しながら、吉原の西洋絵画に感化されるようになりました。その才能は具体美術協会設立前の1953年からすでに吉原の目にとまり、設立後もグループのなかで吉田は重要な役割を担うようになります。絵画とパフォーマンスが交差する領域での創造性を追求するよう吉原に助言を受け、白髪一雄、元永定正、田中敦子、嶋本昭三や村上三郎などの具体作家とともに実に表現豊かで独創性に富んだ作品を生み出します。

同時代の具体や海外の作家と比較すると吉田稔郎はまだあまり知られておりませんが、戦後の前衛美術を語るうえで避けてはならない作家であることは間違いなく、その存在と独創性が後進の作家や動向に及ぼした影響は計り知れません。吉田の作品は、次の具体美術の回顧展などで展示されました。「具体」展（ジュ・ド・ポーム国立美術館、1991年）、「具体—ニッポンの前衛 18年の軌跡」展（国立新美術館、2012年）、「具体：素晴らしき遊び場」展（グッゲンハイム美術館、2013年）。1997年に死去。

ファーガス・マカフリーについて

ファーガス・マカフリーは2006年の設立以来、元永定正、中西夏之、白髪一雄、高松次郎など、戦後日本美術の国際的な評価を確率させるうえで中心的な役割を担ってまいりました。マーシャ・ハフィフ、ビルギット・ユルゲンセン、リチャード・ノナス、ジグマー・ポルケ、カロール・ラマなど独創性に富んだ気鋭の西洋作家の作品展示も行なっています。

日本の美術や文化と深く沿うため、今年3月に東京・表参道に画廊を開設し、ロバート・ライマンの個展を3月に、そして工藤哲巳とカロール・ラマの二人展を6月に開催いたしました。

プレスのお問い合わせ

ファーガス・マカフリー東京

T: +81-(0)3-6447-2660

E: tokyo@fergusmccaffrey.com

ファーガス・マカフリー (ニューヨーク本社)

T: +1-(212)-988-2200

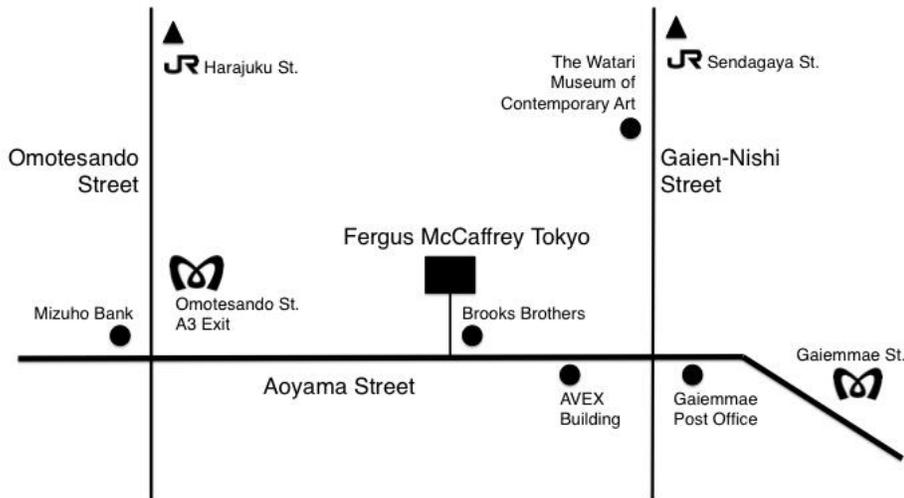
E: press@fergusmccaffrey.com

画像:

1. Toshio Yoshida, *Untitled (54-6)*, 1954. Screw hooks and oil paint on wood, 24 5/8 x 16 3/4 x 1 3/4 inches (62.4 x 42.6 x 4.4 cm). © The Estate of Toshio Yoshida
2. Toshio Yoshida, *BURN by CF No. 23*, 1954. Burnt wood, 19 3/4 x 25 3/8 inches (50.2 x 64.4 cm). © The Estate of Toshio Yoshida
3. Toshio Yoshida, *Untitled, 1963*. Mixed media and cotton on board, 24 1/8 x 28 3/4 inches (61.2 x 73 cm). © The Estate of Toshio Yoshida

ファーガス・マカフリー東京 (アクセス)

東京メトロ (銀座線、半蔵門線、千代田線)
表参道駅 (A3 出口徒歩 5 分)



3-5-9 Kita-Aoyama, Minato-ku, Tokyo 107-0061

Tel +81 (0)3-6447-2660

Fax +81 (0)3-6447-2686

www.fergusmccaffrey.com